

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	価値的・態度的側面のみならず、知識的側面や技能的側面に関する指導がバランスよく行われ、実践力・行動力の育成につながっている事例
-------	---

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

兵庫県姫路市

○学校名

姫路市立八幡小学校

○学校のURL

<http://www.himeji-hyg.ed.jp/index.cfm/24,0,147,html>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】5年生4学級、1・2・6年生各5学級、3・4年各6学級

【特別支援学級】3学級 【合計】34学級

○児童生徒数

【全児童数】1072人（平成24年5月1日現在）

（内訳：1年生171人、2年生162人、3年生181人、4年生197人、
5年生157人、6年生191人、特別支援学級13人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

自主・創造性にとんだ、こころ豊かな児童の育成

【人権教育の目標】

自尊感情を培い、人権感覚を高め、人権課題を解決しようとする実践力を育てる。

○人権教育にかかる取組の全体概要

① 児童の実態把握に努め、課題を明らかにする

- ・児童に仲間づくりや自尊感情を中心とした意識調査を行い、課題を設定し指導のねらいを明確にする。

② 人権感覚を高める豊かな授業を創造する

- ・資料の教材研究や授業の中に効果的手法（ブレインストーミング、ロールプレイなど）を取り入れる。
- ・仲間づくりのためのスキルやよりよいコミュニケーション力を育てるためのライフスキル教育を取り入れる（セルフエスティーム形成スキル、対人関係スキル、ストレス対処スキル、目標設定スキル、意思決定スキル）。
- ・人権感覚を育てるために体験活動を取り入れる（介護施設訪問、車椅子体験）。

③ 人間関係を活性化し、互いのよさやちがいを認め合い支え合う仲間づくりをすすめる

- ・学級や児童のよいところ見つけを行い、教室に掲示する活動を継続して行う。

3. 特色ある実践事例の内容

・取組のねらい、目的

- ① 学校教育全体を通して、自他の命を大切にすると人権意識と自分をかけがえのないものと思う自尊感情を高め、それを基によりよい人間関係を築く。
- ② ライフスキル教育の実践を通して、児童のセルフエスティーム（自尊感情）を高めていく。

・取組を始めたきっかけ

本校には、不登校傾向の児童、相談室登校や校門までしか登校できない児童、ネグレクト傾向にある家庭の児童などが在籍している。また、本校区には児童養護施設があり、幼児期より自尊感情を十分に育まれていない児童が多数在籍している。

学校生活アンケートを実施したところ、「得意なことや自慢できることはありますか」という項目の満足度は低く、自尊感情が育っていない傾向が見られた。そこで、セルフエスティーム（自尊感情）の柱である自己尊重感や自己有能感を高め、児童一人ひとりに自らの可能性や必要性を感じ取らせるためにライフスキル教育の手法を取り入れた。

・取組の内容

1. ライフスキル教育で高めたい力

- 自分にふさわしい目標を設定し、進むべき道を切り開く力
- 物事を正しく判断し、間違った道に進むことを回避する力・・・NOと言える子
- 他者からの脅威に対して正しく対応する力
- ストレスをうまく解消する力

2. ライフスキルプログラムの捉え方

上記のねらいを4つのスキル【技能的側面】を獲得させることで達成しようというもの。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①目標設定スキル・・・・正しい目標を立てる方法の獲得②意志決定スキル・・・・正しく決定する方法の獲得③対人関係スキル・・・・相手にうまく自分の気持ちを伝える方法の獲得④ストレス対処スキル・・・・ストレスをコントロールする方法の獲得 |
|--|

このスキルは、高いセルフエスティーム【内面的側面】を身につけることでより機能する。

セルフエスティーム

3つの感覚

- ①個性の感覚・・・・自分の自分らしい特徴を知る
- ②有能性の感覚・・・・自分の力を実感する
- ③結合性（絆）の感覚・・・・人、場所、物との関係に満足している

3. 研究の方法

- ・指導方法の授業研究
- ・発達段階に応じたカリキュラムの作成

○取組を実現するにあたって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫

・教育課程全般での取り組み

自尊感情はライフスキル教育の手法を取り入れるだけで高まるものではない。教科、道徳、特別活動など学校の教育活動全体を通して取り組む必要がある。そこで、道徳の時間で高まる道徳的な心情、集団活動を通して高まる自主的実践的な態度、教科で高まる自己有能感などを結びつけ、自尊感情の高まりに繋げることができるようなカリキュラムづくりに取り組んだ。

・保護者との連携

子どものセルフエスティームの育成に最も大きな影響を与えるのは親（保護者）であり学校だけで育てられるものではない。親が子どもを尊重し、長所を賞賛し励ましてやることはもちろん、子どもの発達段階を考慮しながら適切なレベルの課題に挑戦させることが、高いセルフエスティームを形成するために大切である。そこで保護者と連携し、一緒になって目標などを考えてもらったり、活動意欲の維持に努めるために定期的に保護者に評価してもらったりした。

・小中学校連携

セルフエスティームは短期間ではなく、長い時間をかけてさまざまな経験によって形成されるものである。そこで小中学校で連携を図り、長期にわたって系統的に考えて、発達段階に応じたスキルを身につけたり、活用したりした。

○具体的な取組

・ライフスキル授業の実践事例（6年生）

（１）主 題 目標をもって、日々の生活を送ろう

（２）題材名 目標に取り組もう（JKYB ライフスキル教育プログラム）

（３）ねらい

○目標を設定し、目標達成のための具体策を考えさせる。

（４）主題設定の理由

・本学級の児童は、明るく元気で、休み時間には友だちと仲良く過ごすことができている。しかし、学校生活アンケートの結果、「得意なことや自慢できることがありますか」や「自分自身のことが好きですか」という項目の満足度は低く、セルフエスティームが十分に育っていない傾向が見られた。そこで、成功体験を通して得られる達成感が自己有能感につながると考え、「運動会の組体操を成功させよう」という目標に取り組ませた。運動会で全員ピラミッドを成功させた体験は児童の大きな自信となった。しかし、運動会が終わり、次のはっきりとした目標がなく普段の生活に緊張感が薄れてきた。日常の生活で自分の目標をもち、それに向けて努力する態度を培っていくことが課題である。

・本題材は、自ら課題を見つけ自ら考えて行動し、よりよく課題を解決する能力を培うための「目標設定スキル」を身につけることをねらいとしている。よりよい目標をもち、それに向かって努力を続け、やり遂げたという体験を重ねることで自己有能感が形成され、セルフエスティームが高まっていく。将来への夢や希望は、主体的に生きる力の源であり、自分の生き方を大切にすることは、自分のみならず周りの人を大切にするということにもつながっていくと考える。将来

への夢を漠然ともちながらも日々なんとなく過ごしている児童が多い中、本題材は、目標をもつことの大切さを理解させ、適切な目標を設定し、計画して取り組んでいく力を育むのに適している。

- ・指導にあたっては、運動会での児童の頑張りに触れ、目標をもつことの大切さに気づかせる。そして、「自分自身の目標を立てよう」をテーマにし、「生活・学習・スポーツ・その他」の中から目標を考えさせる。次に、目標に向かって努力することの素晴らしさを感じ取らせるためにイチロー選手が小学生の時に書いた作文を読む。自分が考えた目標を達成するためのよりよい具体策を考えるために、同じ目標をもつ児童たちとの意見交流を通して、様々な具体策があることに気づかせる。その後、具体策を発表しあい、みんなが個々の目標に向かってがんばっていこうという意欲を高めていく。さらに、ワークシートを利用して毎月の振り返りをさせ、家の人からのアドバイスをもらったり友だち同士で励ましあったりして、目標達成に向けての意欲の維持に努めさせたい。

(5) 本時の展開

児 童 の 活 動	教 師 の 支 援
1. 目標に向けて努力することの素晴らしさを知る。 ・自分が頑張っていることを発表する。 ・イチロー選手の小学生時代の作文を聞く。	・普段の生活を振り返り、自分がどのような努力をしているのか考えさせる。 ・イチロー選手が、目標に向かって日々取り組んでいたことを知らせる。 ・目標に向けての日々努力が、夢の実現につながっていくということを理解させる。
2. 具体策を考える。 ・各自で考える。 ・班の中で話し合う。 ・効果的な方法を選び、ワークシートに書く。	・数多くの具体策を出しやすくし、後の意見交流で活用できるように付箋に書かせる。 ・よりよい具体策を見つけるために、友だちの意見や考えを聞き、話し合わせる。 ・話し合いを円滑に進めるために、話し合いの中心となる児童を決める。 ・話し合ったことを基にし、自分の目標を達成するための具体策を明確にさせる。
3. 目標と具体策を発表する。	・友だちの発表を聞いたり、自分の具体策を発表したりすることで、みんなで個々の目標を達成しようという意欲を高める。
4. 学習のまとめをし、今後の見通しをもつ。	・家の人からのアドバイスや、友だちからの励ましにより、努力を継続しようとする意欲をもたせる。 ・毎月、自分がどこまでできているかを振り返らせることを伝える。

(6) 考 察

○本時にいたるまでの活動

本学級の児童は、自分に自信がなく、自分の必要性を感じることができないという傾向が強かった。自分の良いところや好きなところを書くことができない児童、また、書いても1つ2つしかないという児童も多かった。自分の良いところを知ることや、友だちの良いところを見つけることが、自分の価値観や友だちの大切さを知ることにつながると考え、1日1人友だちの良いところを見つけ記入していった。そして、全員分のいいところが書けたら、それを基にして、1時間の授業で、友だちに自分が見つけた良いところを伝え合った。まず、授業の最初に、自分の好きなところを書き、次に、自分が見つけた友だちの良いところを付箋に書き、友だちに渡した。そして、それをもらった人は、自分のワークシートに書き写し、最後にそれを見て感想を書くという活動をした。

これを2回行った結果、最初の授業に比べて、自分の好きなところが増えた児童

が大半であった。また、友だちの良いところを見つけることで、友だちの素晴らしさに気づくことができた。そして、自分のいいところを知り、「うれしかった」「自分にはこんな良いところがあったんだ。」という感想が多く、自己尊重感が高まったと思われる。



・よりよい目標をもち、

それに向かって努力を続け、やり遂げたという体験を重ねることで自己有能感が形成され、セルフエスティームが高まっていく。将来への夢を漠然ともちながらも日々なんとなく過ごしている児童が多い中、目標をもつことの大切さを理解させ、適切な目標を設定し、計画して取り組んだ。まず、「運動会の組体操を成功させよう」という目標に取り組ませた。最初の「目標達成スキル」の授業だったので、短期間（約1ヶ月後）の目標にし、ひと月後の運動会に向けて、1週間ごとに個人目標を立て、実践していった。その際、より良い目標が立てられるよう、グループで話し合った。そして、全員ピラミッドを成功させた体験は児童の大きな自信となり、やればできるという自分の可能性を確かめることができた。

○本 時

児童は、これまでに色々な場面で目標を立ててきた。しかし、その目標は自分自身を高めることを意識したものではなく、漠然としたものが多かった。そこで、本時は、自分を高められる目標を設定し、達成するための具体的な方法を考えさせることをねらった。

まず、「自分自身を高める目標を立てよう」というテーマを掲げ、目標を設定していった。具体的には「教科のノートのとめをわかりやすく書く」「自主学習を毎日続ける」「サッカーでレギュラーポジションを取る」「少年野球でもっと速い球を投げられるようにする」などの目標が出てきた。その後グループの中で、互いの目標を発表したところ、「努力する項目をもっとくわしくしたらどう？」という友だちのアドバイスを参考にしながらより良い目標を設定することができた。グループ学習を取り入れたことで、簡単すぎず、難しすぎない自分に合った目標を考えることが可能となった。

次に、達成するための具体策を考える際、グループ内でブレインストーミングを行った。ブレインストーミングを取り入れたことで、一人では思いも寄らない方法が次々に出され、その方法に自分の考えを付け足すことができた。その結果、例えば「毎日ピッチング練習を1時間はがんばる」「ノートまとめの時に色分けして大事な言葉だけを抜き出す」「自主学習は毎日1教科ずつにする」など、よりよい具体策を設定することができた。

○ 本時の学習後

子どもたちはそれぞれの目標達成に向けて、意欲的に取り組みを続けていた。よりよい目標や具体策が設定できたため、着実に目標に近づいているという実感をもつことができていたようである。また、振り返りカードを教室の後ろに掲示することにより、友だちに認めてもらったり励ましてもらったりすることで、いっそう頑張ろうという意欲につながっていった。自分で目標に向かって頑張っているという意識と着実に目標に近づいているという実感、そして、それを認めてくれる他者がいることで自分に対する自信を深め自己有能感を高めることができたと考える。

【目標設定ワークシート】

目指せ、目標達成！！
6年(5)組(15)番 名前()

○生活面や学習面、スポーツ面などにおいて、自分ががんばりたいことを書きましょう。

(生活) そうじの時間の最後まで そうじをする。	(学習) 全部の教科のノートまとめ を、しっかり書く。
(スポーツ)	(その他) 家の手伝いを 2つ以上する。

(ぼく・わたしの目標)

全部の教科のノートまとめを
わかりやすく書く。

(目標をきめた理由)
復習しようと思っても、わかりにくいから。

○目標を達成するためにどのようなことをがんばればいいのか考えましょう。

ペンの色を使いすぎない。	黒板に書いてあること、いがいに 先生の言っていたことをかく。
きれいな字で書く。	間をあけて書く。

○家の人からのアドバイス

全部の教科のノートまとめを、
わかりやすく書く。ノートまとめをしてから、
復習しようと思っても、わかりにくいから。復習しようと思っても、
わかりにくいから。復習しようと思っても、わかりにくいから。

【振り返りカード】

目指せ、目標達成！！
6年(5)組(15)番 名前()

11・12 月の振り返り

(ぼく・わたしの目標)

全部の教科のノートまとめを
きれいに書く！

○各項目の評価をしよう。(よくできた◎ できた○ がんばろう△)

○ ペンの色を使いすぎない	△ 黒板に書いてあること、いがいに 先生の言っていたことをかく
◎ 間をあけて書く	○ きれいな字で書く

○目標達成率

0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

○良かったところ・悪かったところ

少しペンをを使いすぎたと思います。
だけど、
間をあけて 見やすく書けたかなと思います。

○家の人からのアドバイス

この親子で、できる限り長く続けよう頑張るね？

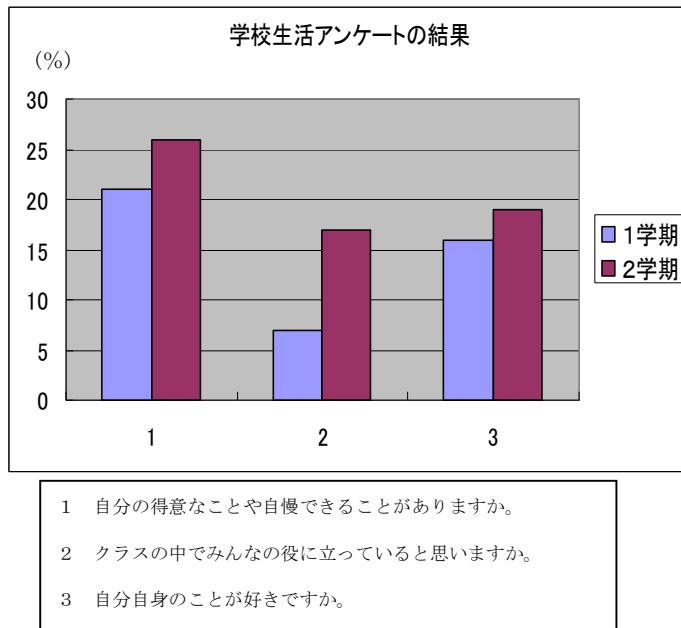
4. 実践事例の実績、実施による効果

・取組の実績

2学期末にアンケートを実施したところ、学年当初、自尊感情が育っておらず、自分に自信がないという傾向があったが、ライフスキル教育を進めることで、改善されていった。

自分の良いところを知ること、自信が持てるようになり、自分自身を肯定的に見ることができるようになったと思われる。

また、普段の頑張りを評価してもらうことで、クラス内で自分の存在価値を確認できたと思われる。そして、目標に向かって取組を続け、やればできるということを知り、達成感を味わうことができた。以上の取組により、セルフエスティームの柱である自己尊重感や自己有能感を高めることができた。



5. 実践事例についての評価

○取組についての評価、及びそう評価する理由

1学期の学校アンケートの結果、自尊感情が低いという本校の課題が明らかになり、児童の自尊感情を高めることを重要課題と位置づけた。そんな折、J K Y B ライフスキル教育プログラムと出会い、実践を積み重ねてきた。ライフスキル教育は具体的な場面を設定して直接的なスキルを学ぶ活動であるので児童にとって分かりやすく、意欲的に取り組むことができる。前述した4つのスキルは学習することによって誰もが獲得できる能力である。この能力が身に付けば、自分自身で適切な目標を設定し、その目標を達成する方法を考え、他者との関わりの中で目標を達成していくことができる。そうすることで自己有用感が育ち、セルフエスティームが高まっていくという仮説を立て研究に取り組んできた。2学期末のアンケートにおいて、3つの設問について大きな変容が見られたことは、この取り組みが間違っていないことを物語っている。しかし、これはセルフエスティームの3つの感覚の中の最も基礎的な部分の変容であり、大きな成果であるとは言えない。技能的側面である4つのスキルの獲得をさらに進め、内面的側面であるセルフエスティームを高めていく必要があると考える。

○現在、実施にあたって課題と感じていること

・評価をどのようにしていくか。

ライフスキル教育でどのような力がついたか考える場合、アンケートなどの意識調査で分かり易い分野もあれば、すぐには効果が分かりにくい分野がある。長期間にわたったり、実践場面で判断したりしなければならない分野をどのように評価していくか今後の研究が必要である。

- ・発達段階に応じてどのように系統的に取り組んでいくか。

発達段階が違えば、経験や意識が違い、また必要とされるスキルも違ってくる。また同じスキルを身につける場合でも、発達段階に応じて活動内容が違ってくる。どの時期にどのスキルをどんな方法で身につけるか研究が必要である。

- ・スキル強化をどのように継続していくか。

教師は子どもたちに対して授業で学習したスキルを日常生活の中で適応するように促し、その結果をクラスで発表させるなど、必要に応じてスキルを反復練習させるための時間の確保が必要である。

参考・引用文献

- 1 「しなやかに生きる心の能力」を育てる J K Y B ライフスキル教育プログラム小学校6年生用 東山書房 川畑徹朗 編著
- 2 J K Y B 健康教育ワークショップ報告書 J K Y B 研究会 編

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

姫路市立八幡小学校

不登校傾向の児童や十分な養育環境が保障されていないと思われる児童等々がかかえる自尊感情や自己有用観をめぐる課題の解決をめざし、人権教育の知識的側面、価値・態度的側面、技能的側面のバランスよい取組を通して、実践力・行動力の育成を図ろうとする、児童数 1000 名余の学校における実践事例である。

特に「自尊感情を培い、人権感覚を高め、人権課題を解決する実践力を育てる」という人権教育の目標を達成するために、①実態調査、②ライフスキル教育のねらいの明確化と活用、③セルフエスティームの高まりの指標の明確化等の工夫が示されている。また、④これらを各教科等の特色を踏まえて全教育活動を通して相乗的・効果的に実践していくカリキュラムづくり、⑤保護者との連携、小中の接続、人権課題の教材化等、子どもの生活圏や発達過程を踏まえた教育コミュニティづくりの可能性の示唆等を含み、「第三次とりまとめ」の趣旨を踏まえた効果的な実践となっていて、参考になる。